

# ハンガリーの オーストリア国境の開放（1989）

——対東ドイツ交渉を中心に——

萩野 晃

## はじめに

1989年5月に始まったハンガリーによるオーストリアとの国境に張りめぐらされた高圧電流の流れる鉄条網の撤去は、まもなく西ドイツ亡命を意図する大量の東ドイツ人のハンガリー国内への流入をもたらした。そして、同年9月にハンガリーがオーストリア国境を開放して東ドイツ市民の西ドイツへの出国を認めたことは、国家評議会議長ホーネッカー（Erich Honecker）を頂点とする東ドイツの共産主義政権崩壊の起爆剤となり、まもなく冷戦構造を揺るがす変動へとつながった。

ハンガリーの国境開放および東ドイツ国民の出国許可に関して、クルツ（Kurcz Gyula）、ナジ（Nagy László）、オプラトカ（Oplatka András）、トート（Tóth Imre）、ジャルマティ（Gyarmati György）の研究では、ハンガリーの政策決定に影響を及ぼした8月19日の汎ヨーロッパ・ピクニック、<sup>(1)</sup>対西ドイツ関係、治安機関の動向などが主要な分析の対象となった。とくに、オプラトカ、トートはハンガリーの国境開放に至る政策過程で西ドイツとのやり取りを重要視した。

本稿では、先行研究の成果を踏まえつつ、さらに西ドイツ亡命を意図し

た東ドイツ人問題での東ドイツとの交渉に焦点をあてて、ハンガリーの国境開放の決定を分析する。そして、冷戦期の同盟国東ドイツとの訣別に至るプロセスの検証から1989年の体制転換当時のハンガリー外交に生じた変化とその歴史的な意義を考察する。

なお、本稿のアルファベットによるハンガリー人の氏名は、現地での表示に合わせ姓・名の順序で記した。

## 1 ハンガリーと東ドイツ

ハンガリー・オーストリア国境の鉄条網の撤去について述べる前に、冷戦期のハンガリーと東ドイツとの関係を概観する。1940年代末までに東側陣営に組み込まれた両国は経済的な関係強化を進めた。しかし、その一方で、1960年代半ば以降にハンガリーで国内統制が緩和され、さらに経済改革が実施されると、ハンガリー社会主義労働者党とドイツ社会主義統一党との関係は良好とはいえなくなった。1968年7月14日、「プラハの春」と呼ばれる当時のチェコスロヴァキア共産党指導部による上からの自由化への対応を協議するためのワルシャワにおけるソ連・東欧5カ国の首脳会談で、チェコスロヴァキアへの強硬措置を主張する社会主義統一党第一書記ウルブリヒト（Walter Urblich）が、強硬措置に消極的な社会主義労働者党第一書記カーダール（Kádár János）を激しく非難したことは周知の事実である。<sup>(2)</sup> その後も一党支配体制の枠内で漸進的に自由化を遂行するハンガリー、高い生活水準を維持しながらもイデオロギー的に強固な独裁体制を堅持する東ドイツ、両国の関係は次第に疎遠となった。

1961年8月13日に東ドイツ当局が西ベルリンを取り囲む壁を構築すると、東ドイツから西ドイツへのヒトの移動が遮断された。ベルリンの壁構築後、他の東欧諸国と比較しても治安当局の緩やかな監視態勢で開放的なハンガリーが、東西ドイツ人の交流における重要な場所になった。ベルリ

ンの壁構築と同じ時期に、ハンガリーでは国内統制の緩和が始まった。そして、西ドイツからハンガリーに入国する旅行者が少しずつ増加した。その結果、ハンガリー西部のリゾート地バラトン湖が東西に離散した親族、友人の再会の場として最適となったのである<sup>(3)</sup>。しかし、その一方で、西ドイツとの人的な交流のために自国民が集まるバラトン湖畔では、東ドイツの諜報機関である国家保安省（Stasi）がハンガリー当局の支持を得て活動していた。

1987年にハンガリーで外国旅行が自由化されると、自国民の西側への逃亡を阻止するためにオーストリアとの国境に張りめぐらされた鉄条網の存在価値がなくなった。さらに、1988年5月のカーダールの退陣後、ハンガリーでは民主化が始まった。1989年になると、もはや高圧電流の流れる鉄条網の存在そのものが過去の独裁と人権侵害の遺物となりつつあった。

1989年2月13日に首相ネーメト（Németh Miklós）がオーストリア首相フランツキ（Franz Franitzky）と国境付近で会談した。両者はハンガリーによる鉄条網の撤去で合意した<sup>(4)</sup>。2月28日、社会主義労働者党政治局は鉄条網の撤去を決定した。当初のハンガリー側の計画では、1991年1月1日までに高圧電流による警戒システムを解除する予定であった。しかしながら、ハンガリーは鉄条網を撤去するうえで、他の社会主義国との関係に配慮しなければならなかった。オーストリアとの国境に鉄条網がなくなると、改革を拒否して厳しい国内統制を維持するルーマニアや東ドイツから西側諸国への亡命希望者がハンガリーに殺到することが考えられた。2月28日の社会主義労働者党政治局の協議では、グロース（Grósz Károly）書記長が鉄条網撤去に際してソ連、東ドイツと協議することの重要性を説いていた<sup>(5)</sup>。

3月3日にネーメトがモスクワを訪問し、ソ連共産党書記長ゴルバチョ

フ（Mikhail S. Gorbachev）から鉄条網撤去の了解を得た。ネーメトは鉄条網について「今やハンガリーを経由して非合法に逃れようとするルーマニアや東ドイツからの市民を捕捉するためだけに役立つものである。ハンガリー人はもはや越境しようとしな。合法的に出国する機会がある。無論、われわれは東ドイツの同志たちに話さねばならないだろう」と述べた。ゴルバチョフは「われわれは国境を厳しく管理している。しかし、より開かれたものにもしてきた」と答えた。<sup>(6)</sup>

モスクワから戻った後、ネーメトは駐ハンガリー・東ドイツ大使フェーレス（Gerd Vehres）をはじめとする社会主義諸国の大使に鉄条網の撤去の意図を伝えた。<sup>(7)</sup> 2月28日のグロースの指摘にもかかわらず、ネーメトはゴルバチョフのケースと異なり東ドイツの首脳に直接、鉄条網撤去の経緯を詳しく説明しなかった。このことは抜本的な改革に及び腰なグロースの党指導部内での求心力の低下に加えて、民主化のプロセスでハンガリーの政策決定の権限が社会主義労働者党からネーメトを首班とする政府に移りつつあることを示していた。実際に、鉄条網の撤去作業は政府主導で進められることになった。

5月2日、オーストリア国境の鉄条網の撤去が始まった。撤去作業は、当初の予定よりも早く進行した。6月27日には、ハンガリー外相ホルン（Horn Gyula）とオーストリア外相モック（Alois Mock）が共同で鉄条網を切断し、開かれた国境を世界にアピールすることになった。<sup>(8)</sup>

1989年3月14日、ハンガリーは「難民の地位に関する条約」（以下、難民条約）に調印した。ハンガリーの難民条約調印には、チャウシェスク（Nicolae Ceaușescu）政権下の隣国ルーマニアから迫害を逃れて流入するハンガリー系やドイツ系の少数民族をめぐる問題が背景にあった。6月12日に同条約が発効すると、ハンガリーはルーマニアから逃れてきた人々のみならず、西ドイツへの亡命を意図して東ドイツから流入する人々を保護

する責任も負うことになった。

多くの東ドイツ人がハンガリーに殺到することを、西ドイツは早い段階で想定していた。6月9日、西ドイツ外相ゲンシャー（Hans-Dietrich Genscher）がフリードリヒ・ナウマン基金のブダペシュト事務所開設を機会にハンガリーを非公式に訪問した。ネーメト、ホルンと会談した際、ゲンシャーはハンガリーの難民条約加盟に言及して、西ドイツへの亡命を希望する東ドイツ国民を強制送還しないよう求めた。ハンガリー側は送還しないことを約束した。<sup>(9)</sup>

ハンガリーによるオーストリア国境の鉄条網撤去が自国に及ぼす影響を、東ドイツ側が早くから深刻に受けとめていたことも確認できる。すでに、1988年5月のカーダールの退陣以降、ハンガリーで経済改革のみならず民主化の動きが加速する中で、東ドイツはハンガリーへの批判を強めていた。その一方で、ソ連でペレストロイカ、グラスノスチが始まったにもかかわらず、頑強に改革を拒む社会主義統一党指導部に対する東ドイツ国民の失望や反発が広がっていた。さらに、ハンガリーが鉄条網の撤去を始めると、東ドイツはオーストリア経由での西ドイツへの出国を意図するハンガリーへの旅行者の急増を警戒した。1961年のベルリンの壁構築以降に自国民の西側への出国を厳しく制限してきた東ドイツ当局にとって、西ドイツに隣接するオーストリアへ通じる国境の開放は国家の存立をも揺るがしかねない脅威と受けとめられた。

5月16日、東ベルリンのハンガリー大使館からの報告をもとに作成された外務省の文書には、1988年当時からハンガリーによるオーストリア国境の鉄条網の撤去が自国民のハンガリーへの流入を引き起こす可能性に東ドイツ国防次官が言及していたこと、ハンガリーの難民条約加盟で予想される東ドイツ国民への対応の変化に東ドイツの諸機関が関心を持っていたことが記されていた。<sup>(10)</sup> 東ドイツ国民の社会主義諸国での主な旅行先はチェ

コスロヴァキアとハンガリーであり、ハンガリー側の統計では、自国を訪れる東ドイツ人は160万から170万であった。東ドイツが一方的に短期間で自国民のハンガリーへの出国を禁止することは困難であった。実際、5月24日に東ドイツ建国40周年の式典の開催について知らせるためにハンガリー外務省を訪れたフェーレス大使は、鉄条網の撤去をハンガリーの内政問題だと述べて、自国民のハンガリーへの出国制限の措置を否定していた<sup>(11)</sup>。にもかかわらず、ハンガリー外務省は東ドイツによる出国制限の実施の可能性を排除していなかった。その根拠となる前例として、1981年の政治危機当時の東ドイツ政府による自国民のポーランドへの出国制限措置を挙げていた。

さらに、6月13日に駐東ドイツ・ハンガリー大使ラカトシュ（Lakatos Ernő）が本国外務省へ送った報告でも、東ドイツによる自国民のハンガリーへの旅行を制限する動きが述べられていた<sup>(12)</sup>。東ドイツ当局がハンガリーへの出国を許可しない理由として、自国民がハンガリーへと出国すれば、最終的にハンガリーで西ドイツへの移住の申請を行うとラカトシュは指摘した。

難民条約の発効に合わせて、東ドイツはハンガリーに圧力をかけてきた。6月12日から14日に、ニープリング（Gerhard Niebling）少将に率いられたStasi代表団がハンガリーを訪問した。難民の地位に関連して、代表団はブダペシュトの西ドイツ大使館による東ドイツ人へのハスポート発行の是非について問いただした。ハンガリー内務省は法律の不備を理由に即答できないと答えた。東ドイツ側はハンガリーの入国管理機関との話し合いを継続し、両国にとって受け入れ可能な解決方法とその実践を求めた<sup>(13)</sup>。

東ドイツはオーストリアとの国境の鉄条網撤去に警戒感を強めたばかりでなく、ハンガリーで民主化と歴史の見直しが進行することにも激しく反発した。当時のハンガリーでは、1990年に自由な総選挙を行うことを前

提にして、事実上の複数政党制が成立していた。7月7日にブカレストで開催されたワルシャワ条約機構首脳会談では、ホルンと社会主義統一党中央委員会書記クレンツ（Egon Krenz）との間で1956年のハンガリー事件の評価、事件当時の首相で1958年に処刑されたナジ（Nagy Imre）の名誉回復をめぐる激しい口論が起こるなど、両国の関係は険悪な状況に陥っていた。<sup>(14)</sup>

## 2 東ドイツ人問題

1989年の夏、西ドイツへの出国を希望する東ドイツ人がハンガリー国内に殺到した。東ドイツ当局が鉄条網撤去への対抗策を講じるよりも早く、多くの東ドイツ人が夏季休暇を口実にハンガリーに入国したのである。東ドイツはハンガリーの動向に警戒感を示していたが、早急に対抗策を取れなかった。先述の通り、ハンガリーに入国する東ドイツ人は160万を越えており、東ドイツ当局にとって、厳しい出国制限措置を講ずるのが現実には困難だったのである。当初、東ドイツ人たちはブダペシュトの西ドイツ大使館に保護を求めた。東ドイツ人が押し寄せた結果、8月13日にブダペシュトの西ドイツ大使館が閉鎖された。その後、ハンガリー国内の4カ所に西ドイツへの出国を希望して帰国を拒む東ドイツ人の収容所が設置された。8月には、鉄条網の撤去された国境を越えてオーストリアへ逃れる者も多くなった。

たとえ鉄条網が撤去されても、第三国のオーストリアへの入国ヴィザを所持しない東ドイツ人が国境を越えることが非合法であったことは言うまでもない。国境の管理も含めて、ハンガリーの治安機関はオーストリアへ脱出を試みる東ドイツ人への対応に苦慮することになった。

8月4日、駐ハンガリー・西ドイツ大使アーノット（Alexander Arnot）がハンガリー内相ホルヴァート（Horváth István）と会談した。8月7日

にホルヴァートからハンガリー外務事務次官ショモジ (Somogyi Ferenc) に提出された記録文書によれば、アーノットはハンガリーを訪れる国連難民高等弁務官と協力して東ドイツ人の問題の解決にあたるよう求めた。そして、アーノットは東ドイツ国民を西ドイツに出国させるようハンガリーに促した。ホルヴァートは「ハンガリーは東ドイツ国民にとって、連邦共和国への非合法的な出国のプラットフォームとなりえない」と述べて、無原則な東ドイツ人の出国に否定的な立場を示した。また、1年でハンガリーを訪れる数百万の東ドイツ人が政治亡命者となるのは想像し難いとホルヴァートは述べた。だが、その一方で、ホルヴァートは難民条約の原則にもとづき西ヨーロッパ諸国の避難民の受け入れ政策と同様に対応する用意があると伝えた。<sup>(15)</sup>

8月8日にはフェーレスがハンガリー外務省を訪れて、社会主義統一党中央委員会および東ドイツ外務省の立場を伝えた。フェーレスは二国間の協定を根拠にハンガリーに対して自国民の西ドイツへの出国を認めないよう要求した。ショモジは難民条約加盟で生じた責任に言及し、人権や人道の問題における自国の立場を説明した。さらに、ショモジは東西ドイツ間の立場の相違について述べた。それに対して、西ドイツが東ドイツ人の問題に関与する必要はないとフェーレスは強調した。<sup>(16)</sup>

ハンガリーと東ドイツは、1969年6月20日に観光ヴィザの免除に関する協定を締結した。同協定の第6条によれば、一方の締結国の国民はもう一方の国に30日間滞在可能で、相手国と自国の大使館、総領事館が同意した場合のみ滞在期間の延長が可能であった。また、同協定の第8条では、一方の締結国の旅行者がもう一方の国の法律に違反した場合、滞在先の国は旅行者の滞在許可を取り消して帰国させることができると規定されていた。東ドイツは第6条、第8条にもとづいて、滞在許可の期限が切れたにもかかわらずハンガリーにとどまっている自国民の送還を迫った。



ハンガリーと東ドイツは8月9日、16日に東ドイツ市民の扱いについて専門家レベルでの協議を行ったが、合意に達しなかった。8月11日、東ドイツはハンガリーから帰国した人々を罪に問わないと約束していた<sup>(17)</sup>。

8月16日、17日にニーブリング率いる Stasi 代表団が再びハンガリーを訪問して、ハンガリー内務次官パラッギ (Pallagi Ferenc) と東ドイツ人の問題を協議した。Stasi の代表団はハンガリー側に二国間のヴィザ免除協定第8条にもとづく義務の遵守を要求した。さらに、東ドイツ側は外国旅行の制限が課されていることを根拠としてハンガリー国内にとどまる東ドイツ人を政治難民として法的に認定できないと主張した。ニーブリングは西ドイツ大使館発行の旅行証明書の有効性を否定しながら、帰国した東ドイツ人を犯罪者としないと保証した。東ドイツは帰還した自国民を罪に問わないことで、政治難民としての認定を阻止しようとした。他方、西ドイツ大使館にいる東ドイツ人がハンガリーから出国許可を得ることはない<sup>(18)</sup>とパラッギは述べた。

パラッギが Stasi 代表団と協議した時点で、ハンガリー側では、まだ西ドイツへの出国を意図した東ドイツ人の扱いについて意思決定がなされていないことがうかがえる。少なくとも、帰国を拒み自国内にとどまる東ドイツ人を「難民」として扱うことに、ハンガリー国内では合意が形成されていなかった。にもかかわらず、かりにハンガリーが自国内の東ドイツ国民を送還すれば、国際社会からの非難を免れなかった。難民条約の発効によって、ハンガリーは帰還を望まない、帰還後に生命の危険にさらされる可能性のある東ドイツ国民を保護する義務を負ったのである。

8月18日にハンガリー外務次官エーシ (Őszi István) がフェーレスと会談し、8月16日の東ドイツ外務次官クロリコウスキ (Herbert Krolikowski) によるホルン宛ての文書に回答した。クロリコウスキはハンガリーの滞在許可の有効期限の切れた東ドイツ国民を帰国させることを要求した。さら

に、クロリコウスキは8月18日の西ドイツ常駐代表ベレテレ（Franz Beretele）との会談で、西ドイツによる東ドイツ国民に対するパスポートの発行の違法性を主張していた。<sup>(19)</sup>クロリコウスキは西ドイツの支援や関与にもとづく東ドイツ人のハンガリーからの出国を認めず、ハンガリーに東ドイツとの二国間協定の義務にもとづく問題の解決を求めたのである。クロリコウスキの要求に対して、エーシは二国間のヴィザ免除協定にもとづく問題解決を拒否した。<sup>(20)</sup>西ドイツが発行したパスポートによって東ドイツ国民を第三国へ出国させることを、ハンガリー側も否定していた。にもかかわらず、あくまで自国民の送還を求める東ドイツと意見の隔たりが明確になっていた。

1989年5月にハンガリー・オーストリア国境の鉄条網の撤去が始まると、オーストリア＝ハンガリー帝国最後の皇帝カール1世（Karl I.）の長子でハプスブルク家の当主オットー（Otto von Habsburg）がショプロン近郊で汎ヨーロッパ・ピクニックを企画し、8月19日に東ドイツ国民約450名を一時的に開放された国境からオーストリアに出国させた。汎ヨーロッパ・ピクニックには、ハンガリーの在野勢力である民主フォーラムのみならず、社会主義労働者党政治局員ポジュガイ（Pozsgay Imre）も関与していた。<sup>(21)</sup>汎ヨーロッパ・ピクニックの開催中、ハンガリーの国境警備隊が東ドイツ人の越境を黙認するうえで、ポジュガイの果たした役割は小さくなかったといえる。

しかしながら、東ドイツ人のオーストリアへの脱出を後押しする汎ヨーロッパ・ピクニックと同じ時期に、ハンガリーの国際社会での立場を危うくしかねない出来事が起こっていた。8月21日の深夜に、ケーセグ近郊のオーストリア国境でハンガリー国境警備隊が越境を試みた東ドイツ人に発砲して死亡させる事件が発生した。同様の国境での発砲事件は、すでに8月18日にソンバトヘイ付近でも発生していた。当時、国境の警備態勢

が緩和されていたにもかかわらず、末端の国境警備隊員にとっては、非法な越境を試みる東ドイツ人への対応は難しかった。

鉄条網撤去以降にオーストリア国境で起こった動きを語る際、汎ヨーロッパ・ピクニックがハンガリーに国境開放を促した意義を強調する傾向にある。だが、汎ヨーロッパ・ピクニックはハンガリー国内外からの有志による東ドイツ人の亡命支援のため国際社会へ向けたデモンストレーションだった。むしろ、国境での発砲事件こそがハンガリー政府に早急な政策決定を迫ることになった。国境での発砲事件が頻発すれば、ハンガリーに対する国際的な非難が強まることは明らかであった。とりわけ西ドイツからの反発が強まるのを、ハンガリー政府は懸念した。当時、ハンガリーは東ドイツからの圧力よりも西ドイツとの関係悪化を恐れたのである。実際、8月21日に駐西ドイツ・ハンガリー大使ホルヴァート（Horváth István）が「西ドイツはハンガリーの人道的な行動に期待しており、1～2カ月以内の解決を望んでいる」と本国外務省宛てに報告していた。<sup>(23)</sup>

すでに、ハンガリー政府は決断の時を迫られつつあった。8月22日にハンガリー政府は自国内の東ドイツ人を自由に出国させることを決定した。オブラトカ、ピュンケシュティ（Pümkösti Árpád）が述べるように、ネーメト、ホルン、内相ホルヴァート、法務事務次官ポリチ（Borics Gyula）、首相府スタッフのイエネイ（Jenei György）、モハイ（Mohai László）によって決定された。<sup>(24)</sup>はじめに、ハンガリー政府は8月23日に西ドイツ大使館に滞在する東ドイツ人を国際赤十字の仲介で出国させることを決定した。24日の深夜に、西ドイツ大使館にいた東ドイツ人117名が空路でオーストリアへ出国した。ハンガリー政府の決定には、1989年にブルガリアのハンガリー大使館に駆け込んだルーマニア国籍のハンガリー系少数民族を国際赤十字の支援で入国させた経験が活かされていた。

8月22日以降、西ドイツの側に立って行動すると決断したハンガリー

は、ネーメト、ホルンのボン訪問へ向けて西ドイツと接触していた。23日に、ネーメトがホルヴァート大使を通じて西ドイツと協議する意思を伝えた。<sup>(25)</sup> オプラトカの指摘するように、ハンガリーにとって、ネーメト、ホルンのボン訪問までに西ドイツ大使館内の東ドイツ人を西側へ移送させておく必要があった。<sup>(26)</sup>

エーシは24日の朝にフェーレスを外務省に呼んで、国際赤十字を介して101名を出国させることを東ドイツに伝えた。<sup>(27)</sup> 当時、東ドイツ側も国際赤十字の仲介による自国民の出国を警戒していたことが、ジャルマティの先行研究から確認できる。8月6日にハンガリー外務省条約局長ゲレグ（Görög János）と協議した際、フェーレスは問題解決のために国際赤十字の仲介を受け入れないと述べていた。<sup>(28)</sup>

自国民を出国させたハンガリーの措置に対して、8月25日にフェーレスが外務次官コヴァーチ（Kovácsi László）に抗議した。さらに、ハンガリーで活動するマルタ騎士団の慈善事業団体のメンバーには西ドイツ人が含まれており、東ドイツ人をハンガリーから出国させるために活動しているとフェーレスは不快感を露わにした。フェーレスは1969年のヴィザ免除協定の義務遵守を要求した。東ドイツからの抗議文には、ハンガリーの行為が1977年3月24日に締結された二国間の友好協力相互援助条約で謳われた領土の一体性や主権の尊重に対する侵害だと記されていた。それに対して、コヴァーチはすでに現状では正常にヴィザ免除協定を適用できないと反論した。<sup>(29)</sup>

### 3 オーストリア国境の開放

国際赤十字を介しての西ドイツ大使館にいた東ドイツ国民の出国後、ハンガリー政府は自国にいる西ドイツ亡命を希望するすべての東ドイツ人の出国へ向けた準備を始めた。ハンガリー政府内部の政策決定のプロセスに  
148(148) 法と政治 66巻1号 (2015年5月)

において、内務省は無効となった旅行証明書での第三国への出国を認めない立場であった。当初から、治安機関を含めた内務省は非合法にオーストリアへ越境を試みる東ドイツ人への対応に苦慮していた。他方、外務省はルーマニアから逃れてきた人々を保護するために難民条約に加盟した経緯から人権問題を重視しつつも、有効なパスポートを所持して自国へ入国してきた東ドイツ人を難民として扱うことに懐疑的であった。<sup>(30)</sup>

難民条約第28条は「締約国は、合法的にその領域内に滞在する難民に対し、国の安全または公の秩序のためのやむをえない理由がある場合を除くほか、その領域外への旅行のための旅行証明書を発給するものとし、…その領域内にいる難民であって合法的に居住している国から旅行証明書の発給を受けることができない者に対して旅行証明書を発給することについて好意的考慮を払う」と規定する。ハンガリー政府はいかなる根拠で国内の東ドイツ人に第三国（オーストリア）への出国を許可すべきか、難しい判断を迫られていた。少なくとも、政府内で第28条にもとづき「難民」である東ドイツ人に旅行証明書を与えることへの合意は形成されなかった。

関連する省間での協議を経て、政府内部では1969年に締結された東ドイツとのヴィザ免除協定の効力を停止することに合意が成立した。そして、先述のように、8月22日にハンガリー政府は9月10日から11日に東ドイツ国民に国境を開放することを決定したのである。

さらに、ハンガリーのオーストリア国境開放の決定に関して、オプラトカは西ドイツとの関係を重視して早期に国境開放を決断したネーメトおよびコヴァーチ、ショモジの役割に力点を置いた。他方、ピュンケシュティは国際環境を見極めながら東西ドイツ双方との交渉を進めたホルンの役割も評価した。<sup>(31)</sup>確かに、1989年当時、社会主義労働者党内の改革派の旗手だったボジュガイと異なり、ホルンは汎ヨーロッパ・ピクニックの準備に関与しなかった。また、ホルンは法的に正当な問題解決やソ連側の動向に

注意を払うことの重要性から、国境の開放と東ドイツ人の出国を急ぐことに懐疑的だったと言える。

ホルンが早急に国境を開放する姿勢に転じるうえで、先述の国境での発砲事件が影響したと考えられる。ホルン自身、回想録で発砲事件を通して国境での事態の深刻さを実感したと語っている。<sup>(32)</sup> いずれにせよ、8月19日から20日にはホルンが国境開放に賛成していたと、オプラトカも指摘している。<sup>(33)</sup>

さらに、当時の国際情勢から、国境開放の決定要因を分析してみる。9月19日の西ドイツ首相官邸の文書には、ホルヴァート大使の自国を取りまく国際環境に関する見解が記されていた。<sup>(34)</sup> ホルヴァートは西ドイツ側に改革を進めるうえで、西側の東西関係に対する現状維持（status quo）、少なくとも急激な情勢の変化を望まない姿勢とハンガリーの孤立について懸念を述べていた。確かに、1989年6月にはアメリカ大統領ブッシュ（George Bush）がポーランド、ハンガリーを訪問し、改革への支持を表明していた。だが、アメリカから多額の経済援助など有効な支援策が示されたわけではなかった。

さらに、当時の東側陣営内部は、改革を志向するソ連、ポーランド、ハンガリー、改革に反対する東ドイツ、チェコスロヴァキア、ルーマニア、ブルガリアの奇妙な勢力均衡の状態にあった。ゴルバチョフにとって、東欧の自立化容認の結果、ハンガリーへのいわば「ペレストロイカの輸出」が実現したといえる。他方、東ドイツ、チェコスロヴァキア、ルーマニアは、頑なに「ペレストロイカの輸入」を拒否した状態であった。とくに、イデオロギー国家としての東ドイツにとって、党指導部が自発的に一党支配体制の放棄を含めた抜本的な改革に踏み込んだハンガリーは最大の批判の対象であった。さらに、今後のソ連国内の情勢次第で反改革派が優位に立てば、ハンガリーの改革にも影響が及ぶことは避けられなかった。

改革を進めるハンガリーにとっての国益とは、ソ連の動向を慎重に見極めながら行動することのみならず、現状を打破して自国に有利な国際環境を創ることでもあった。歴史的にみて、1848年以來のハンガリーで生じた変革の試みは、不利な国際環境の中で頓挫を繰り返してきた。自国に有利な国際環境のためには、ソ連の支持ばかりでなく、東西関係に生じる変化を受け入れる用意のある西側諸国とくに西ドイツから支援を得ることも不可欠であった。さらに、東ドイツからの圧力を弱めるためにも、自国に流入した人々を西ドイツへ出国させる必要があったのである。

8月25日、ネーメトとホルンが東ドイツ人問題を協議するため西ドイツに向かった。両者はボン郊外のギムニツヒ宮殿で首相コール (Helmut Kohl)、ゲンシャーと会談した。ネーメトは人道的な立場から東ドイツ人に国境を開放すると伝えた。コールはハンガリーへの支援を約束した。<sup>(35)</sup>

ホルヴァート大使の回想録によれば、当時、ハンガリー政府はギムニツヒ会談の前後に東ドイツ人問題をソ連側と協議していなかった。ハンガリー政府から国境開放の決定がゴルバチョフに伝えられたのは、9月8日であった。<sup>(36)</sup>

すでに、1988年の段階で、新思考外交を進めるゴルバチョフと彼のスタッフには、東欧とくに改革を進める国の内政に干渉する意図はなかった。国境開放の政策決定に際して、ハンガリー側はソ連から事態への介入がないとみた。ネーメトが国境開放に積極的であったのは、ゴルバチョフの東欧に対する姿勢を正確に読み取っていたからである。勿論、ソ連共産党内部には、ハンガリーに批判的な意見が存在したことは否定できない。だが、少なくとも、西ドイツとの交渉がまとまれば、ゴルバチョフが自国の決定を容認するとハンガリー側は判断したのである。

ギムニツヒ会談後の8月28日、ホルンがフェーレスと会談した。ホルンが手渡した文書には、東ドイツに早期の解決を促す立場が示された。ま

た、東ドイツが問題解決を遅らせた場合、一方的な措置に踏み切ることも辞さないと述べられていた。確かに、28日にハンガリー外務省から東ドイツ外務省に送られた書簡には、1977年の友好協力相互援助条約の精神において、建設的な問題解決のために東ドイツ政府と話し合う用意がある<sup>(37)</sup>と述べられていた。にもかかわらず、ハンガリー側には、同条約にもとづいて東ドイツの立場を擁護する意図などなかった。

8月31日にホルンがハンガリー側の決定を説明するため、東ベルリンを訪問した。もはやホルンには、東ドイツに対して何ら譲歩する意思はなかった。ホーネッカーは病気を理由にホルンと会談しなかった。ホルンに対しては、外相フィッシャー（Oscar Fischer）、社会主義統一党中央委員会書記ミッターク（Günter Mittag）が会談に応じた。ホルンは9月3日の深夜から4日の未明に東ドイツ人の出国を許可するハンガリーの立場を伝えた。その際、ホルンは「提案」でなく「決定」であると強調した。フィッシャーは「そんなことは受け入れられない。（ハンガリーの決定が）破滅的な結果を招く」と反発し、決定の撤回を求めた。ホルンは「ハンガリーは1951年のジュネーヴ国際難民協定（難民条約）に加盟しており、協定の義務が二国間協定に優先される」と反論して、人道的な立場から決定の撤回に応じなかった。ミッタークは「われわれも出国の問題で二国間の関係を悪化させたくない」「わが国の国民を帰国させるための時間的な猶予をあなたがたに与えよう。東ドイツからハンガリーへ人を派遣して、収容所を訪問させる」と述べて、強圧的な態度を取った。ミッタークはStasiの要員を東ドイツ人の収容所に向かわせると主張したのである。ミッタークには、すでに収容所の内部に潜入しているStasiの要員と連携しながら東ドイツ人たちに揺さぶりをかける意図があったと考えられる。Stasiが自国内で工作活動を行うことは、ハンガリーに対する内政干渉に他ならなかった。ホルンは「かまわない。その東ドイツ人たちに危害が及ばぬと保

152(152) 法と政治 66巻1号 (2015年5月)



証できないので、収容所へは彼らの自己責任で行ってもらう」と返答した。<sup>(38)</sup>  
ホルンは10日以内に Stasi のハンガリーへの入国を禁止すると通告した。

ホルンの東ベルリン訪問は、9月1日に東ベルリンの西ドイツ常駐代表部から本国首相官邸へ報告された。報告では、ハンガリーは東ドイツ人の送還に応じず、両国の主張は平行線をたどったと記された。<sup>(39)</sup>ハンガリーが8月25日のギムニツヒ会談での合意を履行することを、西ドイツは確認できた。

9月4日、フェーレスが8月31日の東ベルリンにおけるホルンとの会談に対するフィッシャーの返書をハンガリー外務省に提出した。返書の中で、フィッシャーは従来どおりの東ドイツの立場である自国民を第三国へ出国させることの違法性、1969年6月の二国間のヴィザ免除協定にもとづく自国への送還を主張した。<sup>(40)</sup>

9月5日の社会主義統一党政治局の協議では、ハンガリーに対して批判が集中した。フィッシャーは「ハンガリーは西ドイツからの圧力に屈するだろう。国境開放の決定の撤回は期待できない」と述べた。ハガー (Kurt Hager) も「ハンガリーは二重のゲームをしている。彼らのすることは正常な二国間関係への障害であり、ボンからの指令に従うだろう」と述べた。さらに、ハンガリーは社会主義を裏切ったのだとミールケ (Erich Mielke) は非難した。<sup>(41)</sup>東ドイツからの激しい反発にもかかわらず、ハンガリーは爾々と東ドイツ人の出国へ向けて西ドイツとの協議を進めていった。

9月4日のフィッシャーの口上書に対するハンガリー外務省の回答が、8日にコヴァーチからフェーレスに示された。ハンガリーからの回答では「(東ドイツ人問題の) 二つのドイツ国家による解決に期待する」と述べられていた。さらに、ハンガリーは「二国間協定では対処できない状況にある」「1969年に結ばれたドイツ民主共和国政府との観光ヴィザの免除に関する協定の第6条および第8条の効力を一时无効とする」と返答した。そ

して、コヴァーチは東ドイツの旅行証明書の提示によって第三国への出国を許可し、出国の開始を9月11日の午前零時と通告した。<sup>(42)</sup>

9月9日、フェーレスがホーネッカーからの書簡を事実上、社会主義労働者党の最高責任者となった議長ニエルシュ（Nyers Rezső）に提出した。ホーネッカーはあらためてニエルシュにハンガリー側の決定の撤回を求めた。9日の夜、ニエルシュ、グロース、ネーメト、ホルン、コヴァーチが対応を協議した。すでに6月23日から24日の党中央委員会で失脚していたグロースは発言しなかった。だが、他の出席者の意見は「決定を変えるつもりなどない」ことで一致していた。<sup>(43)</sup>もはや、ハンガリーの同盟国との訣別の意思は揺らぐことはなかった。

9月10日、ニエルシュはハンガリーの決定に理解を求めるホーネッカーに宛てた返書を送った。ニエルシュによる書簡は、ハンガリーによる事実上の最後通告となった。ニエルシュの書簡には、ハンガリーは東ドイツの求めに応じて一週間、国境開放の措置を延期したにもかかわらず、東ドイツの解決を意味するやり方は問題の解決に適切でなく、さらに状況を悪化させたと記されていた。そして、ニエルシュはあらためて1969年のヴィザ免除協定の第6条、第8条の効力を停止させる措置を撤回しないことを強調した。<sup>(44)</sup>

ニエルシュが述べた「一週間の延期」とは、東ベルリンでホルンがフィッシャー、ミッタークに伝えた9月4日の国境開放の期日から数えての7日間を意味する。だが、先述の通り、ネーメトとホルンはコールとゲンシャーに国境開放の期日を9月11日と述べていた。9月11日の国境開放は、たんなる西ドイツと約束した期日通りの措置に過ぎなかった。ハンガリーが正確な国境開放の期日を伝えることなく、あたかも相手の立場に配慮したかのように振る舞って東ドイツの責任に言及したことは、同盟国を見限る態度だったと捉えられる。

ニエルシュからの返書が送付された同じ10日、フェーレスはフィッシャーにニエルシュとの会談内容を伝えて「(東ドイツ) 大使館領事部による収容所のドイツ民主共和国市民と接触して、ドイツ民主共和国の見解を説明しようとする試みは遅<sup>(45)</sup>られ、妨げられた」とハンガリーを非難した。

9月10日の19時に、ホルンが東ドイツ人の出国を許可する決定を発表した。発表の後、オーストリアから75台のバスが4カ所のハンガリー国内の収容所に到着し、東ドイツ人のオーストリア経由での西ドイツ移送が始まった。

9月12日、東ドイツ大使館からハンガリー外務省へ抗議文が送付された。ハンガリーが有効な旅行証明書を所持しない東ドイツ国民の第三国への出国を認めたことは国際法違反であり主権の侵害であると東ドイツは主張して、措置の撤回を要求した。同日、ハンガリーは東ドイツの主権を侵害する意図などなく、東ドイツこそハンガリーの置かれた状況を考慮していないと反論<sup>(46)</sup>した。同じ12日にコールがネーメトに礼状を送った。書簡の中で、コールは「ハンガリーの行動はヘルシンキ、マドリッド、ウィーンにおける全欧安保協力会議 (CSCE) にもとづくものだ<sup>(47)</sup>」と評価した。9月末までに、約20,000の東ドイツ人がハンガリー経由で西ドイツへ出国したのである。

## お わ り に

東ドイツ当局が国境開放への対抗措置として自国民のハンガリー入国を阻止するため、通過地点にあたるチェコスロヴァキアとのヴィザ免除協定を停止すると、今度は東ドイツ国内で反体制デモが発生した。東ベルリンの中心部では、ゴルバチョフも出席した東ドイツ建国40周年の式典の最中にも反体制派の集会が行われていた。まもなく、ホーネッカーは退陣を迫られた。ハンガリーの国境開放からベルリンの壁崩壊まで、わずか2か

月足らずであった。

1989年の夏、ハンガリーにとって、東ドイツはもはや同盟国とはいえなくなっていた。冷戦期の東側陣営において、同盟の根拠となる取決めとは、西側諸国と軍事力で対峙する軍事ブロックとしてのワルシャワ条約ではなく、本質的には陣営内部で互いに国内体制の崩壊を阻止するためにソ連・東欧諸国で張りめぐらされた二国間の友好協力相互援助条約や本稿で論じたようなヴィザ免除協定であった。そして、東側陣営では、本来、外部（西側）からの武力攻撃に対して行使されるはずの集団的自衛権が、1968年のワルシャワ条約機構軍のチェコスロヴァキアへの軍事介入の事例にみられるように、社会主義を防衛する目的で同盟国相手に行使された。とりわけ、西ドイツと対峙する分断国家として自国民への厳しい監視にとどまらず、露骨に他の東欧諸国の内政に干渉してきたのが東ドイツであった。東ドイツにとって、カーダール政権期以来、漸進的に自由化を進め西側諸国との交流に前向きなハンガリーは最も警戒すべき相手であった。

ハンガリーによる東ドイツ人の出国許可の決定は、難民条約の加盟国としての人道的見地のみならず、東側陣営の「同盟」の論理から主権国家の「国益」の論理にもとづく外交への変化による結果だった。ネーメトにとって、ハンガリーの体制転換と経済再建の成功のためには西ドイツからの支援が不可欠であった。8月25日のギムニツヒ会談でも、ネーメトは東ドイツ人への国境開放のみならず、ハンガリーの経済危機、市場経済への転換、<sup>(48)</sup> 厳しい累積債務の状況についてコールに説明していた。他方、ホルンはソ連の立場に配慮しつつも、最終的にはワルシャワ条約機構に代わる自国の安全保障の枠組み構築を目標としていた。体制転換が最終段階に入った1990年2月の時点で、ホルンはハンガリーの北大西洋条約機構<sup>(49)</sup> (NATO) 加盟の可能性に言及したのである。ホルンにとっても、西ドイツはNATOとの関係強化をはかるうえで最も重要な相手だった。両者を

156(156) 法と政治 66巻1号 (2015年5月)

中心としたハンガリーの政策決定において、今後の「国益」追求の障害となる従来の「同盟」のパートナーである東ドイツへの配慮などみられなかった。8月31日にフィッシャーがホルンに述べた「破滅的な結果」とは、国境開放がもたらすハンガリーの政権の弱体化でも東側陣営内部でのハンガリーの孤立でもなく、東ドイツ国家そのものの崩壊だった。

最後に、ハンガリーによるオーストリア国境の開放の歴史的な意義を述べる。1989年9月11日の国境開放は東ドイツの体制崩壊とドイツ統一への導火線というよりも、むしろゴルバチョフによるペレストロイカの開始後に生じていた東側陣営内部における奇妙な勢力均衡の崩壊による陣営そのものの解体への第一歩となったのである。

本稿では、体制転換期のハンガリーの「西」の国境における動きについて論じた。同時代の「東」の国境で生じた変化については、今後の研究課題としたい。

【付記】本稿は、平成25～27年度科学研究費助成事業（挑戦的萌芽研究）の研究課題「ハンガリーの体制転換（1989）と国際環境の史的考察」の研究成果の一部である。

#### 注

- (1) Kurcz Gyula, *Az első határnyitás Sopron 1989. augusztus 19* [最初の国境開放 ショプロン 1989年8月19日] (Budapest: Kortás Kiadó, 2000); Nagy László, “A Páneurópai Piknik és az 1989. szeptember 11-i határnyitás [汎ヨーロッパ・ピクニックと1989年9月11日の国境開放],” *Soproni Szemle*, 55, 2001, 75-87.o.; Oplatka András, *Egy döntés története: Magyar határnyitás-1989. szeptember 11. nulla óra* [ある決定の歴史—ハンガリーの国境開放 1989年9月11日零時] (Budapest: Helikon, 2008); Oplatka András: *A Páneurópai Piknik —ismert tények és fehér foltok [汎ヨーロッパ・ピクニック—知られている事実と空白]*. In Szerk.: Gyarmati György, *A Páneurópai Piknik és határtörés húsz év távlatából* [20年の観点からの汎ヨーロッパ・ピクニックと国境突破] (Sopron-Budapest: Sopron Megyei Város

- Önkormányzata -L'Harmattan Kiadó, 2010), 59-66.o.; Tóth Imre, “Menekültkérdés és határnyitás: A magyar és a német diplomáciai szolgálatok szerepe az 1989-es menekültválság megoldásában [難民問題と国境開放—1989年の難民危機の解決におけるハンガリーとドイツの外交機能の役割],” *Múltunk*, 2009, 4, 4-38.o.; Tóth Imre, “Variációk konfliktuskezelésre, Bonn, Berlin és Budapest diplomáciai erőfeszítései a keletnémet menekültkérdés megoldására, 1989 [紛争処理の多様さ—1989年の東ドイツ難民問題の解決に対するボン, ベルリン, ブダペシュトの外交努力],” *Külgügyi Szemle*, 2009, 3, 159-185.o.; Gyarmati György, “A vasfüggöny és az állambiztonsági szervek alkonya Magyarországon 1989-ben [1989年のハンガリーにおける鉄のカーテンと国家保安機関の落日],” *Múltunk*, 2009, 4, 39-63.o.
- (2) 社会主義労働者党政治局の議事録 (1968年7月15日), *Magyar Nemzeti Levéltár Országos Levéltár* [ハンガリー国立公文書館] (以下, *MNL OL* と略記) M-KS 288.f.5/462.6.e.; 1968年7月14日, 15日のポーランド統一労働者党によるワルシャワ会談の記録文書 (英語訳), Jaromír Navrátil, Antonín Benčík, Václav Kural, Marie Michálková and Jitka Vondrova, eds., *The Prague Spring 1968* (Budapest: Central European University Press, 2006), pp. 218-219 を参照。
- (3) Slachta Krisztina: *Állambiztonság és idegenforgalom a Balaton partján* (Német - német találkozások 1961-1989 között Magyarországon) [バラトン湖畔での国家安全保障と観光産業 (1961年から1989年のハンガリーにおける独独会合)]. In Szerk.: Gyarmati György, i.m., 48-49.o.
- (4) Szerk.: Seifert Tibor, *Magyar történelmi kronológia 1971-1990* [ハンガリー歴史年表 1971-1990年] (Budapest: IKVA Könyvkiadó, 1994), 125.o. ネーメトとフラニツキの首脳会談はハンガリー側のナジツェンク, オーストリア側のルストで行われた。
- (5) 1989年2月28日の社会主義労働者党政治局の議事録, *MNL OL* M-KS 288.f.5/1054.6.e.
- (6) ゴルバチョフ基金所蔵のゴルバチョフ・ネーメト会談 (1989年3月3日) の記録文書 (英語訳), Svetlana Savranskaya, Thomas Blanton and Vladislav Zubok, eds., *Masterpieces of History: The Peaceful End of the Cold War in Europe, 1989* (Budapest-New York: Central European University Press, 2010), pp. 412-413. (以下は, *Masterpieces of History* と略記。)
- (7) Oplátka András, *Egy döntés története*, 75.o.
- (8) 「鉄のカーテン開く—ハンガリーとオーストリア両外相, 鉄条網に穴」

- 『朝日新聞』1989年6月29日。
- (9) Szerk.: Nagy Miklós, *A magyar külpolitika 1956-1989: Történeti kronológia* [ハンガリー外交 1956-1989年—歴史年表] (Budapest: MTA Jelenkorkutató Bizottság, 1993), 293.o.; *MNL OL XIX-J-1-j-NSZK-109-13 002756* 1989 (83.doboz).
- (10) ハンガリー外務省の文書 (1989年5月16日) は, *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-3 002367* 1989 (63.doboz).
- (11) フェーレス大使の発言に関する文書は, *MNL OL XIX-J-1-k-NDK-108-1 3467-1/T* 1989 (82.doboz).
- (12) ラカトシュの報告 (1989年6月13日) はハンガリー外務省の文書, *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-36 002735/1* 1989 (63.doboz).
- (13) Stasiの代表団との会談に関する1989年6月15日のハンガリー内務省の報告書は, ハンガリーの国家保安機関の歴史文書館の機関誌『ベテキントー』(電子版) 2010年第3号における資料紹介, Jobst Ágnes, “Az állambizottság és a keletnémet menekültügy: Dokumentumok a genfi menekültügyi egyezményhez való magyar csatlakozásról [国家安全保障と東ドイツ難民の問題—ジュネーヴ難民条約へのハンガリーの加盟についての資料],” *Betekintő*, 2010, 3, 6.o. を参照。電子版のURLは, [http://www.betekinto.hu/2010\\_3\\_jobst](http://www.betekinto.hu/2010_3_jobst)
- (14) ブカレストでのホルンとクレンツのやり取りは, エゴン・クレンツ著, 佐々木秀訳『国家消滅—「ベルリンの壁」を崩壊させた男 50日の真実』徳間書店, 1990年, 29-31頁を参照。
- (15) ホルヴァートからハンガリー外務省に提出されたアーノットとの会談 (1989年8月4日) に関する記録文書, *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/3* 1989 (63.doboz).
- (16) ハンガリー外務省のフェーレスとの会談 (1989年8月8日) に関する記録文書, *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/2* 1989 (63.doboz).
- (17) ハンガリー外務省による東ドイツ人亡命問題に関する記録 (1989年9月26日), *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/16* 1989 (63.doboz) を参照。
- (18) Stasi 代表団との協議に関するハンガリー内務省の記録文書 (1989年8月23日) は, Jobst Ágnes, i.m., 14-15.o. を参照。電子版は以下のURL, [http://www.betekinto.hu/2010\\_3\\_jobst](http://www.betekinto.hu/2010_3_jobst)
- (19) Hans Jürgen Küsters und Daniel Hofmann (Bearb.), *Dokumente zur Deutschlandpolitik: Deutsche Einheit Sondereditionen aus den Akte des*

*Bundeskanzleramtes 1989/90* (München: R. Oldenbourg Verlag, 1998), S. 362.  
(以下、*Dokumente zur Deutschlandpolitik* と略記。)

- (20) ハンガリー外務省のフェーレスとの会談（1989年8月18日）に関する記録文書、*MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/4 1989* (63.doboz).
- (21) ポジゲイの汎ヨーロッパ・ピクニックへの関与に関しては、Pozsgay Imre, 1989: *Politikus-pálya a pártállamban és a rendszerváltásban* [1989年一党国家と体制転換における政治家の軌跡] (Budapest: Püski Kiadó, 1993), 168-171.o. を参照。
- (22) Oplatka András: *A Páneurópai Piknik*, 62.o.
- (23) Gyarmati György, “A vasfüggöny és az állambiztonsági szervek alkonya Magyarországon 1989-ben,” 51-52.o.
- (24) Oplatka András, *Egy döntés története*, 198.o.; Püskösti Árpád, *A Horn Angyalföldtől a pártelnökségig (1932-1990)* [ホルン アンジェルフェルドから党指導部まで (1932-1990年)] (Budapest: Kossuth Kiadó, 2013), 191.o.
- (25) Horváth István, *Az elszalasztott lehetőség: A magyar-német kapcsolatok 1980-1991* [見過ごされた可能性—ハンガリー・ドイツ関係 1980-1991年] (Budapest: Corvina Kiadó, 2009), 155.o.
- (26) Oplatka András, *Egy döntés története*, 199.o.
- (27) ハンガリー外務省のフェーレスとの会談（1989年8月24日）に関する記録文書、*MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/6 1989* (63.doboz).
- (28) Tóth Imre, “Menekültkérdés és határnyitás”, 21.o. を参照。
- (29) 東ドイツ大使館からハンガリー外務省に送られた抗議文（1989年8月25日）, *MNL OL XIX-J-1-k -NDK-108-1 8325 1989* (82.doboz); ハンガリー外務省のフェーレスとの会談（1989年8月25日）に関する記録文書、*MNL OL XIX-J-1-j-NDK-002106/7 1989* (63.doboz).
- (30) Oplatka András, *Egy döntés története*, 146-147.o.
- (31) Püskösti Árpád, i.m., 176-177.o., 187.o., 189-190.o.
- (32) Horn Gyula, *Cölöpök* [杭] (Budapest: Zenit Könyvek, 1991), 243.o.
- (33) Oplatka András: *A Páneurópai Piknik*, 62.o.
- (34) 9月19日の首相官邸の記録文書は、*Dokumente zur Deutschlandpolitik*, S. 405.
- (35) ギムニツヒ会談に関しては、ホルンおよびホルヴァートの回想録を参照。Horn Gyula, i.m., 246.o.; Horváth István, i.m., 156-157.o.
- (36) Uo., 157.o.
- (37) ハンガリー外務省による東ドイツ人亡命問題に関する記録（1989年9



- 月26日), *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/16 1989* (63.doboz); ハンガリー外務省から東ドイツ大使館への口上書 (1989年8月28日), *MNL OL XIX-J-1-k-NDK-108-1 8325 1989* (82.doboz) を参照。
- (38) ホルンとフィッシャー, ミッタークの会談に関しては, Horn Gyula, i.m., 249-250.o.; Horváth István, i.m., 159-160.o. を参照。
- (39) 9月1日の西ドイツ常駐代表部の報告は, *Dokumente zur Deutschlandpolitik*, S. 391.
- (40) フィッシャーの口上書 (1989年9月4日) はハンガリー外務省の記録文書, *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/10 1989* (63.doboz).
- (41) 1989年9月5日の社会主義統一党政治局の議事録 (英語訳), *Masterpieces of History*, pp. 515-516.
- (42) ハンガリーの回答 (1989年9月8日) はハンガリー外務省の記録文書, *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/10 1989* (63.doboz).
- (43) 8月9日のハンガリーの動向については, Horn Gyula, i.m., 251.o.; Horváth István, i.m., 163.o. を参照。なお, 筆者は2014年, 2015年のハンガリー国立公文書館における外務省の東ドイツ関係文書の調査でホーネッカーによるニエルシュ宛ての書簡を閲覧できなかった。
- (44) ニエルシュのホーネッカーへの返書 (1989年9月10日) は, 以下のURLを参照。http://tte.hu/\_public/osa/nyers\_honecker.pdf
- (45) 9月10日にフェーレンがフィッシャーに宛てた報告 (英語訳) は, *Masterpieces of History*, pp. 518-520.
- (46) 東ドイツ大使館の抗議文 (1989年9月12日) はハンガリー外務省の記録文書, *MNL OL XIX-J-1-j-NDK-108-29 002106/10 1989* (63.doboz)。同日のハンガリーの反論の内容は, *MNL OL XIX-J-1-k-NDK-108-1 8325-3 1989* (82.doboz)。
- (47) コールのネーメトへの書簡 (1989年9月12日) は, *Dokumente zur Deutschlandpolitik*, S. 404.
- (48) ゲンシャーによるコールとネーメト, ホルンの会談内容の記録 (1989年8月25日) は, *Dokumente zur Deutschlandpolitik*, S. 378.
- (49) 1990年2月20日のハンガリー政治学会の国際政治部会におけるホルンの演説, Pietsch Lajos, *Magyarország és a NATO: Esszé, dokumentumok, kronológia* [ハンガリーとNATO—エッセー, 資料, 年表] (Budapest: Magyar Atlanti Tanács, 1998), 63-64.o. を参照。

# Hungary's Opening the Border of Austria in 1989: With Special Reference to the Negotiations with East Germany

Akira OGINO

The aim of this paper is to examine Hungarian foreign policy in the process of the system change of 1989. Especially the author focuses on how Hungary opened the border of Austria to let East German citizen leave for West Germany.

The Hungarian Government began to remove barbed-wire stretched around the border of Austria in May, 1989. The barbed-wire with a high-tension current became a symbol of inhumane dictatorship after removing of restriction to go abroad in 1987.

When more than 6,500 East Germans rushed to Hungarian territory in summer of 1989, East German communist leaders urged Hungary to repatriate them on the ground of the agreement of visa exemption between two states in 1969, which obligated to send illegal visitor and criminal home mutually. Miklós Németh, the Hungarian Prime Minister, and Gyula Horn, the Hungarian Minister of Foreign Affairs, refused to repatriate East Germans with intent to emigrate to West Germany by way of Austria, and made an decision on permitting to leave. Németh and Horn succeeded in gaining support from the West German Government and opened the border to let them go to Austria, September 11, although East Germany protested against Hungary's decision.

This paper consists of following sections:

1. Introduction
2. Hungary and East Germany
3. The Problem of East Germans who wish to leave for West Germany
4. Hungary Opened the Border of Austria
5. Conclusion